

# A LEAF IN THE STORM

*Lin Yutang*

YUTANG

林 語 堂

嵐の中の木の葉

竹内 好 譯

LEAF IN

THE STORM



## 目次

第一章	二
第二章	二〇
第三章	三七
第四章	五三
第五章	六八
第六章	八四
第七章	九六
第八章	一一一
第九章	一二六
第十章	一三六
第十一章	一五三

第十二章	.....	一七三
第十三章	.....	一九二
第十四章	.....	二〇四
第十五章	.....	二一八
第十六章	.....	二三四
第十七章	.....	二四七
第十八章	.....	二五七
第十九章	.....	二七九
第二十章	.....	二九三
解 說	.....	三三四

嵐の中の木の葉

## 第一章

ポーヤは、北平市の東北部にある「王府」を後にして、いつものように、友人の老ベンと夕食を共にするため、大股の、ゆつくりした足どりで、パイプをくわえ、兩手をズボンのポケットにつつこんだまま、ぶらぶらと歩いていつた。この邊は、比較的人家の少いところだつたから、彼は、これといつた形のない小さな空地を幾つか横切らねばならなかつた。

北平の十月といえは毎日そうだが、この日も、日中は晴渡つて、さわやかな、申し分のない日和だつた。そして、夕方の空氣は、心地よく肌を引しめた。それは、戦争前とまつたく同様であつた。こまかい土埃は、秋の日射しに晒されて、乾いた灰色を呈している。たそがれかけた今、やわらかい霞がかつた夕暮れの風景の中で、黒ずんだ青色の壁や、家々の瓦屋根が、むき出しの地面と溶け合い、また、どんどん暗くなつていく遠景に包まれた定かならぬものの影とも溶けあつている。わずかしかなない街燈は、まだ明りがついていなかつた。死のような静寂は、近くの木立で鳴く二三羽のカラスの聲で破られるばかりだつたが、よく耳を澄ますと、この静けさを越えて、まさに限りにつこうとする都會のひそやかな、調和あるもの音を、かすかに、遠

く、聞くことができた。

ポーヤは、この夕暮れの中を三、四町歩いた。すれ違つたのは、家路をたどる二三人の貧しい人たち——ポーヤと同じように黙つて、頭をたれ、手に油壺と、蓮の葉に包んだ夕食のお菜を下げた人たちだけだつた。街角に立つていた黒の制服の、疲れた顔の巡警が、親しげにポーヤに話しかけた。恐ろしいばかりの静けさ。まるで平和に見まがう静けさ——そして平和と死は紙一重だ。

それにしても、空氣が冷え冷えと身にしみて、都會生活の神祕が、周圍に深くたちこめるこの時間の散歩に、彼が心のぬくもりを感じることは、いつもと變りなかつた。

南小街に入つたとき、はじめて、まわりに生氣がよみがえつてきた——街燈は兩側に長くつらなつて輝き、貧しい人たちのための小さな飯屋でもす石油ランプは、あたりの暗闇の中でキラキラ光っている。南小街は、哈達門大街に並行して南北に走る、長い、狭い、幅十フィートから十二フィートあるかないかの、舗装もしてない通りである。

老ベンの家は、この通りに近く、東四牌樓の少し南で、さらに少し南にいけば、いま大部分が日本軍に占領されている住宅街にならうというところにあつた。あちらこちらに二三臺の人力車が走り、他の車は、道傍に燈火を消して休んでいた。車夫は油を節約するため、行先が定つたときはじめて、その小さなランプに火を入れるのだ。

左に曲つて、老ベンの家がある人力車がやつと通れるくらいの小路に入つた。暗闇の中でここだと氣がつく先に、

玄關石につまづきをうになつた。

扉の鐵の輪で數回ノックすると、やがて、家の中で咳をしながら戸口に近づいてくる人の氣配があつた。老ベンの老僕だ。

「どなた？」中の男は叫んだ。

「ボクだ」

「ヤオ旦那ですか」

「うん」

はげしく咳きこみ、から、戸のカケガネを、ゆつくり引きぬく。

「御主人はいらつしやる？」ポイヤが尋ねた。

「今朝お出かけになつたまま、まだお歸りになりません。

どうぞ。夜はもうめつきりお寒うございます。旦那様も夕飯にお歸りになりましょうから」

ポイヤは、中庭をつつ切つて客間に入つた。客間は、一種獨特のガランとした部屋だつた。家具ときたら、ニス塗りの四角な安物の木のテーブルと、紺色木綿の固いクッションを置いた籐イスが二つ三つ、それに、東安市場の古道具屋でせいぜい十ドルもしたかと思われる、危つかしげな古いヒジ掛イス。ポイヤがそれに腰を下す度に、バネがきしつて一方にかしいだ。蔽いの布には、タバコの火で焼いた穴が幾つかあり、身體の位置を變える毎に、鋼鐵のスプリングが動くのがわかる。老ベンは、このイスに腰を下してくつろぐのだ。本と雑誌とレコードが恐ろしく亂雑につめ込まれた斑竹製の本棚が幾つか、北側の壁に沿つて並

んでいる。本は家畜、養蜂から佛教關係に至るまで、奇妙な取り合せをなしている。ポイヤは一度その中に、古い、手あかによくれたスランガマ經（首楞嚴經）の一巻があることに氣がついて、老ベンが禪宗の佛教徒であることを知つた。だが、おかしなことには、二人はこれまで一度も、佛教について議論したことはなかつた。部屋の一隅に、明るい赤色のニス塗りの蓋音機臺があつて、他の家具類から妙に調子外れになつてゐる。

木のテーブルの上には、二人分の茶碗と箸、盃とスズ製の酒壺、漬物やショイガを盛つた小皿類が置いてあつたが、食事はまだ出されていなかつた。この家では、ポイヤが夕食をするものと思つてゐる。というのは、ポイヤは幾晩も幾晩も、その友とこのテーブルで、そしてこの盃で、酒をくみ交し、戦争と政治を論じたからだ。最後には二人とも酒にあきて、向き合つたまま泣く。それから二人は、話を止めて、黙つたまま盃を傾ける。飲めば飲むほど、涙はあふれた。そうした後では、二人は、一言も口をきかずに、満ち足りた氣持で涙をぬぐいながら、お互いの息づかいを聞きつつ、三十分餘りも相手の顔をまじまじと眺めたりする。悲しみの中にある人にとつて、酒の力で泣き、涙を流すことは、藥だといわれている。そして、二人はとくに、二十九軍が退却して北平の人々を征服者の手にゆだねた最初の一週間、このような涙を樂しみ、必要としたのだつた。古人は、このような酒につける名前を知つていた。彼らは、こうした飲み方を「愁飲」（悲しみに沈んで飲む）



と呼んだ。しかし、ポーヤと老ベンは、これに「對」の一字を加えて「對愁飲」(悲しみに面して飲む)と呼ぶことにしていた。こうした酒盛りの翌日、彼らはよく、こんなことを相手にいつたものである——「昨晩は、なかなかよく對愁飲したものでないか。君はまさに、悲しみそのものだった。君の顔を見ると、ボクはとにかく泣けて仕方なかった。おかげで気分もずつとよくなり、ぐつすり寝たよ」この習わしは、後になつて杜絶えてしまつたが、それでも、二人が夕食を共にするときには、何時も一二杯は傾けた。

老僕が、熱い茶の入つた土瓶をもつて入つてきて、茶碗につき、「旦那様は間もなくお歸りになるでしょう」といつた。

ポーヤは、ギンギンするヒジ掛イスに腰を下し、その上に置いてあつた新聞を取り上げて讀もうとした。しかし、すぐ新聞を手から放して、床の上に落してしまつた。彼は戦争のニュースよりも、もつと自分にとつて切實な神祕について、思いにふけつた。數年前に、老ベンを知るようになって以來、この人物は、ポーヤの心をすつかり占領してしまつてゐる。このガランとした部屋に、一人の偉大な人物が、ポーヤの知る限りでは唯一人の完全に幸福な人間が、妻も子もなしで、世に知られず住んでゐるということ、ほとんど信じられないように思えた。これこそ、孔子が君子についていつた「恐れもなく、憂いもない」自分というものを發見した男なのだ。

北平は、老ベンの存在を知らない。彼は何一つ、變つたことをしたわけではない。表面、彼の生涯は失敗の連続だった。彼の極端な熱狂性は、常に彼を粉砕し、財産を半減させる結果に終つた。もう十年以上になるが、彼は北平でトマトを栽培することを思いついた。他に誰も思いつかなかつたことだから、これは確實に金になると彼は考えた。その理由は、簡單明瞭だつた——北平(當時は北京と呼ばれてゐた)には、甘い柿がなる。トマトは「西洋の柿」と呼ばれてゐる。したがつて、北京では甘いトマトができるはずだ。柿は木に生るのにトマトは草木であるという事實を、彼は考えに入れなかつた。北京は、トマトを生長させることを拒否した——少くとも、老ベンの土地で生長させることは。こうして彼のトマト園は、數千ドルの損失に終つた。次に手を出したのは、肝油で育てる輸入レグホンの養雞だつた。しかしその卵は、あまり高すぎて、五十個でわずか一ドル、夏になると一ドルで百個近くも買える土地の卵とは、とても太刀打できなかつた。輸送や原價のことは、まるで念頭になかつたのだ。その次の空中樓閣は、養蜂で、これも北京では、誰も考えつかなかつた着想だつた。こうした不幸な試みを幾つかやつた後、彼は賢明にも残りの財産を銀行に入れて、失望の彼方に安住する幸福な身の上となつた。ポーヤは、親友同志がよくやるように彼の姓に老の字をつけて、彼を老ベンと呼んだ。

十年前、老ベンが三十五のとき、彼の妻が死んだ。彼は生前の妻に、學校で教えている三十七の「注音符號」を覺

えさせようと勇敢に努力し、そして失敗した。大へんな英雄的努力だつた。彼は、學校用の掛圖を買つてきて、家の壁にかけ、各符號のわきに、自身で圖を描きもした。妻は雄々しく、三十七の符號と格闘したが、それを理解することとは、ついにできなかつた。綴り方には想像力と、多少の抽象的思想を必要とする。個々の符號の音を覺えた後も、言葉の音はどうしても出て來ないのだ。「モー」「イー」「エン」の符號が、とにかく「ミン」の音にならない。そしてこれにはどうしようもなかつた。ベンが彼の太つた、忠實な、古風な妻に教えるため、ひどく苦勞しているのを見ることは、傷ましかつた。そして、もつと胸を打つのは彼の妻が、學齡をはるかに過ぎた年で「ポー」「ブホー」「モー」「フォア」と符號の暗記に努める姿だつた。

「モー・イー・エンで何になりますの」と妻が聞く。

「モー・イー・エンでミンだ」彼は、もう五十べんもくり返している。

「どうして？」

「イー・エンでイン……」

「なぜ？」

「だからモー・インでミン」

「この舶來物は、一體、何なの？ 私にはとてもわからぬ。私は、孔子様の字の方が好き。『ティエン』は天だし、『ティ』は地だし、それを覺えてしまえば、覺えたことになるのだもの」

「だがテ・イエンでティエンになるんだよ」

「頭の中をかき廻さないで頂戴。私はもう勉強しない」「しなきやダメだよ。これが教育なんだから」

「ね、私のことも、あなたの失敗の中に入れてちようだい。私はあなたのトマト園にも、養雞場にも、一度だつて反對したことがなかつたわ。今度は私を勘辨して」このことがあつてのち、彼は妻に教えることを斷念した。それでも彼は、無學な妻を相手としてやつたこの勉強が、楽しいものだつたと人に語つた。妻が死ぬと、彼は丁重に葬り、以後二度と結婚を考えなかつた。

この後、彼は注音符號を、百姓の頭にも入るよう、やさしく改めることを試みたが、また幸福にも失敗した。

こうして表面、彼は失敗者であり、北京は彼の存在を知らなかつた。政界には何人かの知人があり、黄埔軍官學校の卒業生も何人かは知つていたし、廣西省柳州の出身だつた關係で、同郷の廣西の領袖白將軍とも個人的に親しい間柄であつた。しかし、彼として賢明な行き方には違ひなかつたが、彼は一度も、政治に立ち入ろうとしなかつた。もし今度の戦争がなかつたならば、彼は人に知られずにその生涯を閉じ、この物語も世に現れないで終つたであらう。

もう七時になつていたが、老ペンはまだ歸らない。ポイヤは、たまらなく老ベンと話がしたかつた。時とするど、じつとしていられない位だつた。北平が陥落して、親戚連中が南方へ去つてからは、ポイヤには、他に話相手がなかつた。日中は、自分の莊園に、囚人のように引こもつていのが常で、夕方になると始めて、勇氣を出して、ベンに

會いに出てくるのだ。この友人と顔を合せていると、自分のいいたいことは何でも話して、理解してもらえりし、質問すれば、はつきりした回答が與えられるような氣になるのだつた。二人の友情は、ポーヤの孤獨が進むにつれて深まつていつた。ペンと意見を交換し、ペンの意見をきき、その忠告を得たいとポーヤは切實に願つた。

多くの人は、ポーヤが、典型的な金持の若旦那で、いつも若い婦人たちに取り巻かれてちやほやされてゐる氣取屋だと思つていたし、たしかに彼は、そういう評判を立てられるようなさまじなことをしてきた。ポーヤは今日の午後、マリンと會つたときのことを思い出した。ここ數日來、彼はマリンを戀してゐるような氣がしてゐる。いつたいペンは、マリンのことをどう思ふだろうか。ポーヤとペンの二人は、生活が非常にかげ離れてゐる——ポーヤは若いし、背が高いし、好男子といわれ、富有な大家族のありとあらゆるゼイタクの中で育てられ、美術にも、文學にも、また日常の享樂においても、洗煉された好みをもつた男である。一方、老ペンはといえば、身なりはみすぼらしく、一切の物質的な快樂に無關心な隠者なのだ。そして四十五にもなつて、女氣なしの獨身生活を送つてゐる。それにもかかわらず、ポーヤはその友人が、偉大な、同時に寛大な魂と、何となく幻想的な心情と、子供のよりに柔和な心臓との持主であることを知つてゐた。豊かな天分があり、垢ぬけて、處世にもたけ、世間的な女の理解にも事かかないポーヤではあつたが、ただ彼には、祖父の老ヤオから受

けついだ神祕主義の一片が残つてゐた。この點でポーヤはペンの同類たりえたわけである。かつは、自分と性質の異なるペンの天分を理解し、高く評價できたわけである。ポーヤのようなよい頭をもち、よい環境に育つた若者が、一個の犬儒主義者に陥るといふ極めて自然の成り行きを、危いところで救つたのは、ほとんど老ペンの働きであつた。

老ペンはかつて、近所の小僧や何か四五人の子供を集めて、自宅で自由教育を始めたことがある。そのため、無數の難問題が、彼にふりかかつてきた。彼はこの時も、注音符號を教えようとした。親方の中には、小僧が早起きしなくなつたと苦情を持ち込むものもあるし、子供たちが孔子様の正しい文字を習つてゐないと文句をいう人も出てきた。生徒は一人、一人と缺けていつて、とうとう二十三になる、うすのろの若者一人しか残らない有様になつた。この子が毎晩、机に向つてコツコツと勉強し、老ペンが、この子の石のような心に光を導き入れようと、無限の忍耐で努力してゐる姿を、ポーヤはよく見かけた。今となつては唯一人の生徒となつたこの若者が、「千字文」を覺えたいという希望なので、うまくいつて六カ月はかかろうと思われたこの難事業に、老ペンは取りかかることにした。若者はランプの光の下で、額に汗をにじませながら、筆を百斤の重さがあるばかりに握りしめて、習字に精出した。「一體、何の役に立つんだい」と、ポーヤは聞いてみた。「どうせ何も覺えられない無價値な若僧を相手に、毎晩の一番いい時間をムダに使うなんて？　こうした人間が、一

人だけ讀み書きできるよになつたとして、それが社會全體に、どれほど利益になるものかね？」

「君にはね、分らないんだよ」と、ペンは答えた。「君には、この子の心に何が起つているかが、分らないんだ。悪戰苦闘なんだよ。この子の生活は、君やボクの生活がボクらにとつて價值があるほど、價值あるものじやないといえるだらうか。どこが違つていうのかい？ この子はバカだよ。値うちのある人間じやないさ。ボクはこの前、とうとうシビレを切らして、それでも最後までやり抜くつもりか、つて聞いてやつた。ギョツとしたらしかつたね。どうか、ここで勉強を止めないでくれ、というんだ。眼に涙が浮んでいたつて。學校に行くだけの金がないから、ここでの勉強は、彼として唯一のチャンスだというのだ。『一體、それはどういうわけだ』つて聞いてみた。そこで彼が告白するには、近所に好きな娘がいるが、彼が讀み書きできるまでは、結婚してやらない、というんだそらだ。これが彼にとつて、何を意味するか分るかい、彼の將來にとつてね？ ボクの努力次第で、彼がこの娘さんと結婚できる場合にさ。君たちのような金持は、一人の少女と結婚するために、往々數千ドル、數萬ドルもの金を費う。いま、彼に起つている問題が、どうして、われわれに起る場合よりも輕いといえるか。君にその違いがいえるかい？ 戀のためには自殺する人だつてあるんだ」

「あの子の勉強を打切つたら、彼は自殺すると思うかい」  
「自殺はしないだらう。しかし、あの子の將來は變るだらうね——娘さんは、あの子と結婚しないかも知れない」

こうして老ベンは、實直だが少しにぶいこの若者が、見知らぬ一少女と、結婚できるというだけの理由で、冬から

春にかけての六カ月間を、共に辛抱し通した。冬の間、老ベンは帽子を買つて、若者に贈つた。若者が生涯で手にした、たつた一つの帽子だつた。結婚式の當日、老ベンは、一帳羅の長衣を着用して、宴會にのぞんだ。彼は花嫁に、「先生」として紹介され、花嫁は彼にお禮をのべた。老ベンはこのとき、花嫁がアバタであることに氣がついた。もつとも、アバタの點を別としては、いい顔立ちではあつたが。彼は幾分幻滅だつた。が、こう自身にいい聞かせた——「アバタがどうした。アバタの人は普通、頭がいいものだ。それに、あれは勝氣な娘だし」娘は、數百ドルの蓄えがあつた。だからこそ、自分で夫を選ぶこともできたわけだが、結婚後はその金で夫のために店を開いてやつた。御亭主はあの帽子を、結婚式の當日着用したほか、後には餘程重要な日でないとはならず、また、別の帽子を買うこともせずに、ひたすら先生の親切の記念としていた。老ベンは夫婦から、變らぬ感謝と忠誠とをかち得、六カ月の夜間の教授という仕事で、十分報われたと感じている。

手もちぶさたのままに、ポーヤは、本棚にあるスランガマ經の一巻に眼を止めた。老ベンの性格にまつわる神祕感から、ポーヤは、その經典を開いて、佛教のどういふところが、その友の性格に影響を與えたかを、探つてみたくなつた。彼はページをくつてみた。書いてあることはすべて

生と、死と、悲しみと、感覺のもろもろの誤りに關する事柄であつた。ただ、梵語の名前や、佛教用語が數多く出てくるため、どの章句も、讀み通すには骨が折れた。ちよろど、暗號交りの電報を讀むよな、あるいは、日本の新聞を、中國人が讀もうとするときのよなものであつた。ポイヤが本を閉じて、元の場所に戻そうとしたとき、冒頭に書かれてあつた「遊女」という文字に眼が止つた。彼は手を止めて、讀んでみた。そこは物語になつていて、讀みやすかつた。彼は、ページの終りまで眼を走らせた。佛陀の前に集つた覺者たちの大衆のくだりである。佛陀の愛弟子で聰明な若人であるアナンダ(阿難尊者)は、街に托鉢にいつたまま、集りにはまだ歸つて來ていない。

そのとき、アナンダはいつものように、考え深く、鉢をもつて街に入り、几帳面に、一軒一軒食を乞うて歩いた。彼の唯一の考えは、最後の施主に至るまで、すべての人々から、同じように施しを受けることだつた。アナンダにとつて、施しの大小、美醜、あるいは施し手がクシャトリア(統治階級)であるかスードラ(卑賤階級)であるかは、問題でなかつた。彼にとつて、何よりも大切なことは、すべての人にたいして同様に、何の區別もなく、親切と慈悲の手をさしのべることであつた……

アナンダは、順序正しく食を乞うて歩く中に、マウデシカという遊女の家にやつてきた。彼女には、プチティという美しい娘があつた。この若い乙女は、アナンダの

若くて綺麗な顔立ちに惹かれ、若い僧をバラモンの呪文にかけるよ、熱心に母に乞うた。母は魔法を修じた。アナンダは、魔力のため乙女の魅力のとりことなり、かの家に入つて、乙女の部屋に至つた……

佛陀は終始、アナンダの身の上に何が起りつつあるかを、知つていた。そして今や、マンジュスリ(文殊菩薩)を呼び、アナンダが誘惑に打ち負けようとしている場所に至つて、くり返し大ダラニを唱えよと命じた。マンジュスリがその家に至るや否や、呪文は解けて、アナンダは自制をとりもどした。マンジュスリは、アナンダとプチティをはげまし、二人は佛陀に見えるべく、マンジュスリと共に佛陀のもとに歸つた。

ポイヤは、本を元の場所に戻した。後になつて、彼はこの物語を思い出し、老ベンをマンジュスリになぞらえたことがあつた。

\* \*

思いに沈んだまま、ポイヤは時の經つのを忘れていた。ベンが歸つてきたのは、もう八時に近いころだつた。

「失敬、どうも遅くなつてしまつて」と、ベンはその體格に似合わず、へんにカン高い、むしろ女性的な聲で、いつた。彼の聲は、普段は低い。だが昂奮すると、異常にはりつめた、子供のよな高い調子に變る。その高い調子がかなり續いたあとで、語尾が一オクターヴ低く終るよなこ

とがある。また時には、彼の聲帯が、同時に高低二つのオクターヴで振えるのではないかと思われるような、分裂音を出すこともあつた。感動が激しいときには、高調子から低調子への變化は、しきりに起り、低調子のときはそうでないのに、高調子のときは、よくどもつた。色のあせた古い綿入れの長衣——幾らか擦り切れ、昨年一冬のホコリで、脇の方などがうすよくれた長衣を着た彼の姿は、その異常な背丈と恰幅のよさとを別にしては、人目を惹くようなところは何もなかつた。近眼のため、銀ブチ眼鏡をかけていたが、それがキマジメな印象を與え、高い額の横シワがさらに、その感じを強めた。額は少し禿げ上り、薄い、灰色がかつた髪の毛は、後頭部で長く伸びて、オールバックになでつけてあつた。このため、彼の立派な額は、ますます秀でて見えた。それは、最も實際的な髪の手入れ法である。というのは、全然クシを入れる必要がないから。あるいは、日に百べんもクシを入れたも同然だから。つまり、話をしている間、しよつちゆう五本の指でクシけずつているのだから。その額は、やや肉づきのいい角顔で、落ちついたキマジメさの中に、微笑を用意していた。頬骨は高く、兩眼は比較的深くくぼみ、鼻は廣く、口元は鯉に似て、中央が高く、そこから兩側に曲線を描いて下り、廣い下あごに十分支えられて、好ましい形をしている。顔の筋肉は、親身と親切を現わすシワやヒダを織り出している。皮膚は、年の割に不思議なほど、なめらかで白い。ヒゲはむろん濃くない方だつたので、薄い口ヒゲを刈り込みもせず、伸びるに

まかせていたが、それが口を、ちようどカッコで包んだような工合になつていた。笑うと唇がまくれて、桃色の上齒グキと、平な齒並みが現れる。その齒は過度の喫煙で薄黒くなつていた。しかも、彼の容貌には常に、フランス人なら *sympathique* と呼ぶだらうような人なつこさがただよい、その秀でた額や、灰色のもじやもじやした髪の毛と混りあつて、獨特の精神的な美しさを呈する。好きなものやあるいは氣に入つたことなどについて話すとき、彼のよく動く唇は、まん圓いトンネルの形になることがあつた。彼の服裝で、唯一つ外國風なのは、恐ろしく幅廣くて、大きな革靴で、これは、足の指にはたつぷり餘裕があると言いつ張つて、わざわざ注文して作らせたものだ。「足が靴を形作るべきであつて、靴が足を形作るべきではない」というのだ。靴ヒモを結ぶ方法は、一度も習つたことがないので、解けたヒモを結ぶために、往來の眞中で立停ることがよくあつた。しまいには、靴ヒモが解けたまま、ゆつくりと、くつたくない足どりで、歩く術を心得るまでに至つた。何時だつたか、ポーヤは、彼が片方の靴に、全然ヒモなしで歩いているのを見たことがある、ヒモが切れたまま、買うことを忘れていたからだ。結局、ポーヤは、新しいヒモを買つて、彼に進呈した。

老僕が、熱湯の入つた金ダライを持つて來て、蓄音機のわきの、部屋の隅にある臺にのせた。ペンが、エネルギッシュに、騒々しく音を立てて、身體を洗つている間に、老僕は、いそいで食事を運び込んだ。

「うまくいつたかい？」と、ポーヤが尋ねた。

「うん。ボクに二千ドルくれなにか」友は、タオルをしぼりながら答えた。それ以上いわないところがペンらしい。

「何に使う？」

「彼女は彈藥が必要なんだ。彼女はそれを、西山へ送らなければならぬ」

ポーヤは先に腰を下した。老ペンは、きれいな、つやつやした、食欲旺盛な顔で、食卓についた。

「彼女がいうには、東北大學の若い學生や、教授たちが多數、彼女と行動を共にしようとしている。だが、彼らには鐵砲がない」

老僕が酒を注いだ。ポーヤはペンを見、それから老僕の方に眼を移した。

「大丈夫。これより忠實な召使はいないよ」と、ペンはいつて、話を續けた。「ボクは、このような殺し合いを憎む。しかしだ、もし君が、ボクのように田舎へ出て、そこで、

何が行われているか、その戦慄すべき虐殺と、家屋の損失状態を眼のあたり見たら、君だつて、わが人民が自衛の力をもたねばならない、ということが分るに違いない。ボクが關心をもつのは、ただ人民だけ——人民の上にふりかかっていることだけだ。これは、二つの軍隊の間の戦争じゃない。完全な山賊行爲なのだ。備えのないものは滅びる。村々が丸ごと焼拂われてしまつたのだ」

二人は盃を擧げて、しばし黙然と飲んだ。

ペンは、自分の考えをたどりながら、また話を始めた。

「道ばたに、子供の切りさいなまれた死體を見たり、あるいは、仰向けに、またうつ伏せに、倒れている瘦せ細つた硬直した百姓女の死體を見たら、君はどんな氣がする？

この連中は、死なねばならぬどんなことをしたというのだ？ そして子供と、婦人と、老人と、若者とが、村民全部が、宿なしにされて、行くえもしらずに、さまよい歩く！ このかあいそな、平和な、難民たちは一體、何をしたのか、君自身に問うてみるがいい。答えられまい。考えることは止したがいい。これこそ、ボクが歸つてきた譯だ。彼らのために、何事かをなさなければならぬ」

「で、君は何をしようというのだ？」

「小さなこと。あまりにも小さなことも知れない。ボクは全力をつくして、幾人かの人を助けることはできる。問題は大きすぎて、一人の人間の手には負えないのだ。奥地に向つた幾百萬もの難民が、どうやつて生きていくのだろう？ だが、ボクらは、そのうちの何人かを助けることはできる。彼らが生きていくのを助け、人間が人間にたいして行つた不正の幾分かを、救つてやることはできる。ボクは、有金全部をもつて奥地に行き、自分に何ができるかを、ためそうと思う。いいかい、これはみな『人間』なんだよ——兄弟、姉妹、夫、妻、おばあさん——みな生きたいと願つている人間なんだよ。これがボクの仕事だ。君と違つて、ボクは自由だ。ボクはどこでも好きなところへ行き、どこでも必要なところに止るつもりだ」

ポーヤは愕然とした。彼は今まで、戦争をこのような、

人間的な、個人的な觀點から眺めたことがなかつた。彼は戰局の進展を、分析的に追つてきた。地圖を研究し、戰鬥部隊の兵力と火力を測定し、蒋介石の聲明を検討し、以後の發展を豫想し、そして、戰爭全般の戰略プランを、自身に作り上げていつた。どんな些細な出來事も、一つの戰鬥なり軍隊の移動なりも、彼の注意から洩れはしなかつた。彼は、上海に中國側の戰線を布くことは、戰術上の間違ひであり、これを長期にわたつて守ることは、不可能だとの結論に達していた。戰爭の大局については、民衆の志氣の力とか、北平その他の場所における敵將兵の行動とかいつた、ハカリにかけられないものさえも、彼は計算に加えていた。こうして彼は、もし事態が、自分の戰略どおりに進むならば、日本は絶對に、中國を征服しえない、という樂觀的な結論に到達するのであつた。かつて大元帥蒋介石の敵であつた廣西の李、白二將軍が、蒋介石と統一戰線を誓つたばかりでなく、彼らの配下にある全廣西軍を戰線に投じたことから、ポーヤは、非常な安堵の思ひをした。また二十九軍の撤退後、北平統治の責任を引受けたため、國賊と思われた張自忠將軍が、その後變裝して、父親の喪に服する息子の姿で、自轉車に乗り、天津へ脱出したという報道も、ポーヤには、愉快な驚きであつた。これは、彼の戰略論について、勇氣と確信とを與えるものだつた。けれど、彼が立てたような戰略論は、全人民の援助があつて、はじめて成功するものだからである。それは哲學的な、純粹に戰略的な、戰爭觀だつた。しかし、彼の長期戰の戰略が、

その中に、都市の燒拂いと、住居を追われた幾百萬の人々の、言語に絶した痛苦とを含めていゝという事實については、老ベンがやつたように、純粹に人間的な立場から考へてみたことは、これまで一度もなかつた。神祕主義的な傾向をもつた彼の心眼は、二つの國民の意志の格闘の中に、群衆を見るばかりで、個人を見なかつた。そして、數百萬人の大移住を、一つの國民的悲劇としては眺めたが、それを、「兄弟、姉妹、夫、妻、おばあさん」の人間悲劇として考へたことはなかつたのだ。

老ベンが、これらの言葉を發するのを聞いたとき、ポーヤにとつて、戰爭は突然、冷靜な分析の對象でなくなつて、自身に關係した、生々しいものになつた。彼は突如としてさとつた。個々人の生活から成る強烈な人間悲劇が、これら幾百萬の流民たちによつて上演されつつあることを。それは、不斷の移動と、もがきと、生存と、笑いと、希望と、死とを含み、困苦と自己ギセイとにさらされている。戀人や縁者との別離と再會、戰時の異常な喜びと失望なども、そこには伴われているにちがいない。彼は思つた。一切の彼の推理、地圖、戰爭論は、頭の中だけで生み出した一種の非人間的愛國主義であつて、一切の個人的な行動から彼を切り離しておくためのカーテンの作用をしているのではないか。彼の酔いしれた理性が見落していたものを、老ベンはその胸に感じ、そして今、それを素朴に、あたらかく、避けがたい力をもつて、彼に傳えたのである。彼は、この人間悲劇に加つて、冒險したいと願つた。背の高い彼の體



内にひそむ内的欲求を、満足させるべき行動の見透しが開けたことに、彼は、本能的な喜びを感じた。彼の眼は、キラキラと光った。

「ねえ、君、君はどうするつもりだ？　どこで、何を、どうするつもりだ？」

「ボクは、奥地へいこうと思う。困難が一番ひどいところへ。そこでは、一番よいことができるし、最も多くの人を救うことができる」

「戦場の移動を追つて？」

「うん、戦場の移動を追つて」

「それで君は、計畫もなく、組織も持たずにだろうか？」

「全然なしだ。ボクは、組織というものを信用しない。他人が實行するためのプランを、坐して立案する委員会なんて御免だ。自分で行つて、一緒に生活してみないかぎり、援助が最も必要な場所や状況が、豫測できるものか。ボクは誰からも、命令なんかされたくない」

「どのくらい、國のためになるだろうか？」

「わからんね。だが、子供を一人助ければ、助けただけいわけだ」

「個人の生命というものが、それほど大切だろうか？」

「そうだ」

眞理は一般化して議論してみても、何の意味もない。しかし、一定の瞬間に誠心こめて誓い、それにもとずいて行動がなされるところの眞理は、それを語る人の表情や聲がもつすべての力と、現実性ともつものなのだ。

「いつ出發する？」

「金が手に入り次第。銀行はメチャクチャになつていて。上海に送金するのがやつとだ」

食事が終つてから、ポーヤはパイプに火をつけて、腰かけたまま、考えにふけつた。老ペンは、部屋の内中につつ立つて、タバコを吸いながら、新聞を明りに近づけて讀んだ。日本軍の勝利を報じた同盟の記事のほか、これといつたニュースはなかつた。ペンは、新聞をテーブルに放り出して、部屋の中をあちこち歩き廻つた。それから、新しくタバコに火をつけて、大きな眼鏡越しに、ポーヤを見つめながら、籐イスのついに腰を下した。

「あの趙母チヤウモという人は、素晴らしい婦人だね。五十か六十になるおばあさんで、ボクにそういつてたが、全く無學だそうだ。城内にかくれている。この人の勇氣は、賞讃に價する。ボクが會いにつつたときも、ボクに援助を頼んだりはしない。要求するんだよ。そして誰も、それを斷ることができない」

「いくら約束した？」

「ボクは君を念頭に置いて、彼女のために二千ドル調達することを約束した」

「いいよ、それで……で、彼女は、どこで彈藥を買うつもりなんだろう」

「この城内でさ。二十九軍が棄てていつたヤツで、カイライ警察が集めたのが、山のようにある。筋を通していつて金を拂いさえすれば、手に入れることができる。そして彼